歴史地震
第 31 号(2016) 71-74 頁
受付日 2015/12/01， 受理日 2016/03/09

［資料］ 南北朝期の『細々要記』と『七巻冊子』の史料価値
―1361年の地震活動に関連して―

石橋　克彦*

Historical Values of *Sai-sai Yoki* and *Shichikan Sasshi* in the 14th Century: In Relation to the Seismic Activity in 1361

Katsuhiko ISHIBASHI
2-28-26 Yokowo, Suma-ku, Kobe, 654-0131 Japan

"Chronological table of major distractive earthquakes in and around Japan" in *Rika-nenpyo* (Chronological Scientific Tables), a currently standard earthquake catalogue in Japan, says that earthquake tremors had continued around Kyoto since July 20, 1361, which may have been foreshocks of the great Nankai earthquake of July 26 in the same year.　These tremors are described in historical documents called *Sai-sai Yoki* and *Shichikan Sasshi*, as well as in other rather unreliable historical materials.　For high-quality investigation of this foreshock-like activity, I performed historical source criticism of *Sai-sai Yoki* and *Shichikan Sasshi*.　As a result, it turned out that these two materials are the same documents having different names, and that, on the other hand, *Sai-sai Yoki* has two versions considerably different from each other; the one, a fictitious document on the 14th century's social situation, and the other, historical records of the circumstances in and around *Kofukuji Temple* in Nara near Kyoto.　Descriptions of earthquakes in 1361 are contained only in the former fictitious document, and therefore the reliability is poor.　The examination of the foreshock-like activity itself will be made in another paper.
Keywords: Historical Source Criticism, *Sai-sai Yoki*, *Shichikan Sasshi*, 1361 Nankai Earthquake, Foreshocks.

§1. はじめに

南北朝時代の康安元年（北朝年号；南朝では正平十六年）六月二十四日（ユリウス暦1361年7月26日）の南海巨大地震に関連して，『理科年表』の「日本付近のおもな被害地震年代表」［纐纈（2015）］は，同年六月二十二日の地震の項で「この月十八日より京都付近に地震多く，<中略>次の地震<二十四日の地震>の前震か？」と書いている．（<>内は引用文にたいする筆者の注；以下同じ）

この見方は今村（1977）以来の定説の感があるが，根拠は『増訂大日本地震史料　第一巻』［武者（1941）；以下，武者史料］にある．同書は，正平十六年六月十八日条に『続本朝通鑑』の記事（丁酉地大震，自是日日震動不止）を載せ，「京都地強ク震ヒ，餘震数日ニ亘レリ」という綱文を立てている．

『続本朝通鑑』の記事の信憑性が低いことは石橋（1998）が指摘したが，六月十八日からの地震活動に関して『新収日本地震史料　第一巻』［東京大学地震研究所（1981）；以下，新収史料一］が『細々要記』（『紀州変異災害誌』所収）と『七巻冊子』（『奈良六大寺大観七　興福寺一』所収）を追加し，さらに『新収日本地震史料　補遺』［東京大学地震研究所（1989）；以下，新収史料補遺］が『大阪編年史一』所収の『細々要記』を追加した．いずれも，「六月十八日ノ比ヨリ，毎日五七度ニ至リ大地震」と記している．

歴史記録の信憑性は多数決で決まるものではないが，似たような記事が増えると，史料に詳しくない人々には歴史的事実のように映りかねない．しかし実は，『細々要記』と『七巻冊子』の当該地震記事は信憑性が低い．これは，六月十八日以来の地震活動と，南海地震に対応する東海地震［石橋（1998，2014）など］を検討するうえで，重要なことである．

『細々要記』と『七巻冊子』は異名同書といえるのだが，一方，『細々要記』には史料価値のかなり異なる同名異書があり，既刊地震史料集は史料価値が低いほうから地震記事を採取したのである．

この事情は，『国書総目録』（岩波書店）を継承・発展させた「日本古典籍総合目録データベース」（大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国文学研究資料館）や，『増訂国書解題』（1926，1968複製版，臨川書店）・『国史文献解説』（1957，朝倉書店）・『史籍解題辞典　上』（1986，東京堂出版）・『国史大辞典　10』（1989，吉川弘文館）などの

* 〒654-0131　神戸市須磨区横尾 2-28-26
電子メール：ishi@kobe-u.ac.jp

史籍解題ではよくわからず，不正確ないし誤った解説もある．そこで本報告で整理し，新収史料一と同補遺が掲載する地震記事の信憑性が低いことを示したい．ただし，検討の対象は翻刻本のみである．

なお，康安元年六月十八日から地震が続いたという記事は，武者史料の六月二十四日条の『大乗院日記目録』と『参考太平記』にも出ているが，地震活動そのものに関する議論は他日にゆずる．

§2.『細々要記』と『七巻冊子』の諸刊本

『細々要記』と『七巻冊子』は，大まかには，元弘四（建武元）年（1334）から永和三年（1377）ないし至徳三年（1386）ないし明徳二年（1391）までの畿内中心の出来事を日次的に記したものである．

筆者が調べた範囲では翻刻本が5種類ある．それらを表1にまとめた．そこにあるように，2つの系統に大別される．それらを本報では「天正書写本」と「東金堂（とうこんどう）本」と仮称することにする．

2.1 天正書写本『細々要記』

「天正書写本」の内容は，記主の身近な事件や見聞を書き留めたという性質からは程遠く，全国規模の動向が主体である．奥書に，興福寺實嚴（じつごん）僧正が記したもので興福寺金堂の宝だと書いてあるが，例えば文和五年（三月二十八日に延文と改元；1356）二月十七日夜の興福寺東金堂の雷火災という同寺の重大事件をまったく記さない．

記述全体に『太平記』との類似が強く見られ，『太平記』中の，史実と異なる誤りや，事実と思えないエピソードまでが，いくつか同じように（簡略化されて）書かれている．例えば，建武元年八月に紫宸殿の上の怪鳥を隠岐廣有という者が射た話，貞和三～四年の楠正行の事跡（藤井寺合戦，住吉合戦，四条縄手での討死）や高師直による吉野焼き討ちを貞和四～五年と誤記している点，康安元年の大地震で天王寺の金堂が顛倒した際に難波浦から大龍二つが浮上して金堂に入った話などである．

内容の全般にわたって『太平記』諸本との異同を子細に調べれば，両者の関係がもっと明らかになるかもしれないが，本稿ではそこまでは立ち入らない．次項の東金堂本『細々要記』と同じ記事がないわけではないが，全体的にはまったく別の記録といってもよいほどで，南北朝動乱の推移に強い関心をもつ者が，東金堂本を換骨奪胎しつつ『太平記』を抄録して作ったのではないかとすら思われる．

なお，応安七年（1374）四月九日の，実在が疑われる奈良の大地震なども記している．

この書を頭から無視するのはよくないが，当時の事実そのものを追究するうえでは，特に史料地震学にとっては，史料価値が低いといってよいだろう．

2.2 東金堂本『細々要記』

「天正書写本」にたいして「東金堂本」は，興福寺と周辺の様々な出来事が主体であり，記主が体験・見聞した事実を記したといってよいだろう．前項で触れた文和五年二月の東金堂の火災は当然記されている．『大日本史料』は，こちらを『東金堂細細<または，細々>要記』の名称で40件以上引用している（「天正書写本」は引用していない）．

第一～第四には，それぞれ冒頭に「實嚴」または「金勝院<こんしょういん>實嚴」，第七の冒頭には「金勝院禪實<ぜんじつ>」と記されている（第五は無名，第六は欠落）．なお，實嚴を禪實に改名したことが第四の文和二年十二月八日条にみえる．『国書人名辞典』（岩波書店）によれば，實嚴は暦応元年（1338）生まれで至徳四年（1387）以降に没，法性寺座主にも補され，大僧正に任ぜられた．

『国史大辞典』は，これを『東金堂細々要記』という名称で立項している［永島（1989）］．ただし，最初『史籍集覧』が『七巻冊子』と題して収録公刊したとしているのは誤りである．また，『参考太平記』（水戸徳川家が『大日本史』を編纂する基礎として，全国的な史料調査にもとづいて校訂・作成；元禄四年<1691>刊）が「天正書写本」ではなくて「東金堂本」を引用しているように説明しているのも不適切だろう．これについては，そもそも『続史籍集覧』の近藤瓶城の跋文が誤っていると思われる．

近藤は，『参考太平記』が引用する『七巻冊子』が『真本校訂細々要記』だというのだが，『参考太平記』は引用書目の一つとして「細細要記」を挙げ，「興福寺の沙門實嚴が記す所也．其の載せる所，建武元年に始まり，永和三年に終わる．凡そ七巻．號して七巻双紙と曰う．蔵して興福寺東金堂に在り」（読み下し）と注記している（1943改訂再版，大洋社）．すなわち「永和三年に終わる」というから，これは「天正書写本」である．実際『参考太平記』の校勘の割注の「細々要記曰」のいくつかを見ると，「天正書写本」を引いていると思われる．

永島（1989）は「東金堂本」について，「記事は春日社興福寺に限定されるきらいはあるが，珠玉もまみえる南北朝動乱期の好史料」と述べているが，確かに史料価値の高い記録だと判断される．なお，表1のE欄に書いたように，元々は（たぶん實嚴の）より詳しい日記があり，それを別々に抄出した写本が（少なくとも2種類）伝存したと推測される．

§3．おわりに

表2に，新収史料一と新収史料補遺が掲げる『細々要記』と『七巻冊子』の地震記事を，「天正書写本」と「東金堂本」の関係記事と比較して示す．

この表から明らかなように，史料価値の高い「東金堂本」では当該地震記事の期間が欠落しており，

表1 『細々要記』と『七巻冊子』の刊本の種々のバージョン（太字は本稿での仮称）
Table 1.　Various versions of printed *Sai-sai Yoki* and *Shichikan Sashi*.

記号	書 名	収録する叢書	概　　要	内　　容
A	細々要記 さいさいようき	『史籍集覧』 近藤瓶城（へいじょう）が校訂し明治14-18年(1881-85)に出版，和装本467冊，総目解題1冊，観奕堂版 「**天正書写本**」と仮称	2冊である．奥書には“細々要記七冊，興福寺實嚴僧正記す所也．其の載する所，建武元年〈1334〉正月に始まり，永和三年〈1377〉十月に終わる．興福寺金堂什物〈秘蔵の宝物〉也．天正十九年〈1591〉十月書写了”（読み下し，〈 〉内は石橋注）とあり，続けて“明治十六年癸未〈1883〉五月新収地誌課本謄写以一本校之了　近藤瓶城”という跋文（あとがき）がある．	“元弘四年正月廿九日改元アリテ建武元年トス漢朝ノ年號ヲ模サル同比都ニハ大内裏造營ノ御沙汰有ヨシ云々”に始まり，“〈永和三年〉十月和田楠以下ノ官軍河内ヘ發向所々横行兵粮米ヲトル京方ノ軍士馳向テ合戰スト云トモ官軍戰ヒ強ク武家方敗北多ク討取ラルト云々”で終わる．全国規模の南北朝動乱の年代記である．
B	真本校訂 細々要記	『続史籍集覧』 近藤瓶城と子の圭造が明治26-31年（1893-98）に出版，和装本71冊，近藤活版所，のち洋装10冊に改装，洋装本では第一冊に収録 『新訂増補史籍集覧』の第33冊（臨川書店，1967）に再録 「**東金堂本**」と仮称	瓶城の跋文は，“私は史籍集覧に細々要記七巻を収めて興福寺僧實嚴の書としたが，實嚴の真本は別にあった．前に収めたのは南都の僧が記した無名の別本だった．その書を細々要記と題するのは誤りで，私がそれを採ったのは二重の誤りだった．その書を作った者は誰だかわからない．それは南北時事とでも名付けるのがよいだろう．今回の書は，興福寺東金堂所蔵の實嚴原書の副本に就いて校して収める．参考太平記が引用する七巻冊子というのはこれである．〈下略〉”という趣旨のことを述べている．	“建武元年甲戌　四月廿日舞人兵庫亮中御門住東大寺ヨリ罪科スト云々”に始まり，“〈至徳三丙寅；1386〉十一月廿七日春日御社新造シテ御遷宮ナル暁ニナルト云々”で終わる．興福寺に密着した年代記である．第一～第七だが，第六（康暦元年〈1379〉～嘉慶三年〈1389〉）は，第五の冒頭に“採ルヘキ事ナキヲ以テ之ヲ欠ク”と書かれていて，欠落している．
C	七巻冊子 しちかん さっし	『改定史籍集覧』 近藤父子が『史籍集覧』を改定して明治33-36年（1900-03）に出版，洋装本32冊，総目解題及書目索引1冊（近藤活版所），第12冊に収録 『新訂増補史籍集覧』の第8冊に再録 これは「**天正書写本**」	A の書名を変えたもの．跋文に“明治十六年癸未〈1883〉五月，内務省地誌局本を以て之を謄写し，一本を以て之を校し了る　近藤瓶城／明治三十四年〈1901〉十一月帝国図書館本を以て再び校し了る．此の書一名七条草子と称す．而して前版題して細々要記と為すは誤り也．其の由，続史籍集覧に収むる所の真本細々要記跋文に載せる有り．故に詳しくは記さず　近藤圭造”（読み下し）と記されている．	A と同じ．
D	細々要記	『国史叢書』 黒川真道編・国史研究会発行（第1期；大正3-6年（1914-17），35冊）の第25冊 これは「**天正書写本**」	解題では『続史籍集覧』の跋文を引用し，書名は「細々要記」を変える必要はない，内容が重要であり本書は他本をもって校合したので便利よき本だろう，と述べている．	A，C と基本的に同じ．ただし，AとCが漢字・片仮名であるのにたいして，これは漢字・平仮名である．また，表2にあるようにAとCは「大熾盛光〈だいしじょうこう〉」を誤記しているが，これは正しく書いている．
E	細々要記 抜書	『大日本仏教全書』 仏書刊行会編刊（明治45-大正11年（1912-22），150冊，別巻10巻，目録1冊）の124冊目『興福寺叢書第二』に収録 基本的に「**東金堂本**」	基本的にBの同類．共通の記事が少なくないが，記事の総量はBより少ない．ただし，Bにない記事もかなりある．これらのことや書き方から推測すると，元々實嚴の詳しい日記があり，それを別々に抄出したものがBと本書（E）それぞれの底本（相異なる）ではないかと思われる．解題等はない．	冒頭，四月廿日の記事の前に二月の“一。常喜院修二如レ例。十一日事也。一。常楽會在レ之。〈以下略〉”の2カ条があり，また最後，至徳三年十一月廿七日の記事のあとに，“明徳二辛未〈1391〉　一。賢乗坊住所ハ□□ト云々。今年六十八才云々。”までの17カ条の記事を載せる．第一～第七といった区分はない．

表2 『細々要記』と『七巻冊子』に関して，新収史料一および新収史料補遺の地震記事と刊本の記事の比較
Table 2. Comparison of the 1361 July 20's earthquake descriptions in *Sai-sai Yoki* and *Shichikan Sashi* which are contained in *Shinshu Nihon Jishin Shiryo* and in the reprints of *Sai-sai Yoki* and *Shichikan Sashi*.

史 料 名	地 震 記 事
『細々要記』 （紀州変異災害誌） （**新収史料一**）	六月十八日ノ比ヨリ毎日五七度ニ至リ大地震畿内近国遠国ニ至ルマデ山崩レ堂塔倒レ傾キ損ズ、南都同様金堂南円堂破損、廿日午ノ刻地震天王寺ノ金堂テン倒スト云々 下旬ノ比阿波ノ国高ノ湊ト云所高塩俄ニシテ　在家数千軒海ニ沈ミ男女数万人死スト云々　廿三日巳ノ刻俄ニ空クモリ雪降寒気寒風身ヲ切ガゴトシ
『七巻冊子』 （**新収史料一**）	六月十八日（延文六年）ノ比ヨリ、毎日五七度ニ至リ大地震、畿内近国遠国ニ至ルマテ、山崩レ、堂塔倒レ傾キ損ス、南都同様、金堂南円堂破損、
『細々要記　五』 （大阪編年史　一） （**新収史料補遺**）	六月十八日ノ比ヨリ、毎日五七度ニ至リ、大地震。畿内・近国・遠国ニ至ルマテ山崩レ、堂塔倒レ傾キ損ス。南都同様、金堂・南円堂破損。廿日午ノ刻ノ地震天王寺ノ金堂テン倒スト云々。下旬ノ比、阿波ノ国高ノ湊ト云所高塩俄ニミチ、在家数千軒海ニ沈ミ、男女数万人死スト云々。廿三日巳ノ刻、俄ニ空クモリ、雪降、寒気寒風身ヲ切カコトシ。去ヌル十九日、天王寺ノ金堂テン倒ノ以前、難波ノ浦ヨリ大龍二ツ浮ヒ来リ、金堂ノ中へ入。其後雷電ヲヒタヽシク、大地震シテ金堂テン倒スト云々（イ本、京都ニモ東寺ノ金堂テン倒スト云々）。南方ニモ、コノ天災ニヨツテ、御慎御祈等ヲ仰下サルト云々。
『細々要記』 （史籍集覧） （仮称，天正書写本） 『七巻冊子』 （改定史籍集覧） も同文，但し改行なし	六月十八日ノ比ヨリ毎日五七度ニ至リ大地震畿内近國遠國ニ至ルマテ山崩レ堂塔倒レ傾キ損ス南都同様金堂南圓堂破損廿日午ノ刻ノ地震天王寺ノ金堂テン倒スト云々 下旬ノ比阿波ノ國高ノ湊ト云所高鹽俄ニミチ在家數千軒海ニ沉ミ男女數萬人死スト云々 廿三日巳ノ刻俄ニ空クモリ雪降寒氣寒風身ヲ切カコトシ去ヌル十九日天王寺ノ金堂テン倒ノ以前難波ノ浦ヨリ大龍二ツ浮ヒ来〈七巻冊子は「リ」が入る，石橋〉金堂ノ中へ入其後雷電ヲヒタヽシク大地震シテ金堂テン倒スト云々 南方ニモコノ天災ニヨツテ御慎御祈等ヲ仰下サルト云々 京都ニモ東寺ノ金堂テン倒スト云々 青蓮院尊道親王勅ヲ受内裏ニテ大熾威〈ママ，正しくは「盛」，石橋〉光ノ法ヲ行ハルマタ御祈トシテ最勝講ヲ行ハル去ヌル貞和二年以後行ハレス召ニヨツテ南都ヨリモ京都へ向フ〈下略〉
『真本校訂細々要記』 （続史籍集覧） （仮称，東金堂本）	当該地震記事なし 全七巻のうち，第四は文和五年（三月二十八日に延文と改元）十月で終わり，第五は貞治五年正月から始まり，「延文元年十一月～延文六（康安元）年～康安二（貞治元）年～貞治四年」を欠く．

新収史料が採録したのは，史料価値の低い「天正書写本」の記事である．これらを全く無視するのはよくないが，信憑性が低いことに十分留意しなければならない．

謝辞
査読をしてくださった匿名査読者と髙橋昌明氏，編集担当の西山昭仁氏に感謝いたします．頂いたコメントが本稿の改善に有益でした．

対象地震： 主として 1361 年の地震活動

文 献

今村明恒，1977，正平16年（1361）6月24日の南海道沖地震，那須信治（編）「大地震の前兆に関する資料―今村明恒博士遺稿―」，古今書院，20-22.
石橋克彦，1998，1361年正平南海地震に対応する東海地震の推定，日本地震学会講演予稿集1998年度秋季大会，P125，http://historical.seismology.jp/ishibashi/archive/1361Ko-anTokai98.pdf
石橋克彦，2014，南海トラフ巨大地震―歴史・科学・社会，岩波書店，262 pp.
纐纈一起（監修），2015，日本付近のおもな被害地震年代表，自然科学研究機構国立天文台（編）「理科年表　平成28年」，丸善出版，724-757.
武者金吉（編），1941，増訂大日本地震史料，第1巻，文部省震災予防評議会，960 pp.（復刻日本地震史料，第1巻，2012，明石書店）
永島福太郎，1989，東金堂細々要記，国史大辞典，第10巻，吉川弘文館，87.
東京大学地震研究所（編），1981，新収日本地震史料，第1巻，210 pp.
東京大学地震研究所（編），1989，新収日本地震史料，補遺，1226 pp.